

静岡県日中友好協議会ニュース

No. 117

2019. 12



江南地方の水郷古鎮

～過去・現在・未来へ悠久と紡ぐ～ 烏 鎮

上海から約140km、車で約2時間半、杭州から約80km、車で約1時間半で、江南水郷六大古鎮の一つ「烏鎮」に到着します。

「烏鎮」は、歴史が古く2500年の歴史があります。隋の時代には、全長1,794kmにおよぶ大運河の工事が行われ、この水路も重要な交通手段を担い、中国全土の経済の発展をもたらしました。

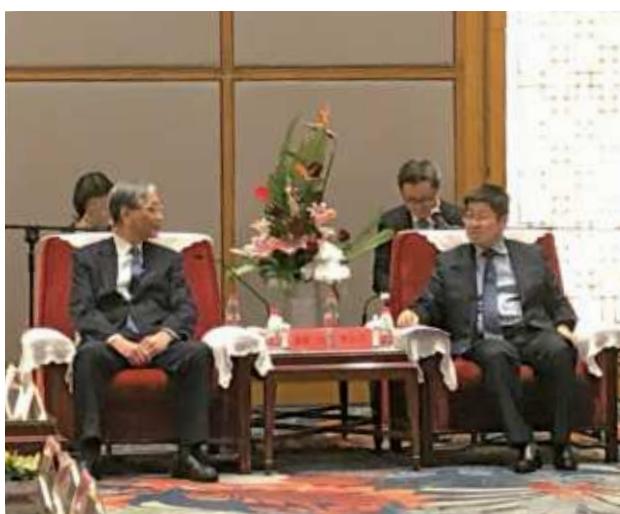
江南地方の古い町並みが今も現存し、どこか懐かしさを感じさせられるレトロな街並と水路をゆったり流れる船の光景は、まるでタイムスリップしたような気持ちにさせられます。水路を通じて、人・物の往来が盛んであったために、特産の天然草木染の製作工程をみることができ、また55度の白酒や激辛の地元料理を味わうこともできます。最近では、毎年、人工知能（AI）、5G、ビックデータ、クラウドコンピューティング、デジタル製造、工業インターネットなどの分野に焦点を当てた「世界インターネット大会」が、ここ烏鎮で開催されています。

【特集】 11月11日、多彩な事業を杭州で開催

去る11月11日(月)、浙江省杭州市において、静岡県・浙江省経済交流促進機構第28回会議、静岡県・浙江省経済ビジネス交流会が開催され、また静岡県国際経済振興会と浙江省貿促会との間で、覚書調印式が行われました。静岡県側から代表団・交流団現地参加を含め総勢50名が一連の行事に参加しました。

促進機構第28回会議、プラットフォームの機能を強化

11月11日(月)午後、杭州市の浙江世貿大飯店において、静岡県・浙江省経済交流促進機構第28回会議が開催されました。第28回会議は、浙江省側は浙江省委員会の朱従玖主席代表(浙江省民政府副省長)をはじめとする委員、静岡県側は静岡県委員会の栗原績主席代表(本協議会理事長)をはじめとする委員が一堂に会し、2018年の事業報告と2019年の事業計画を審議・承認したほか、双方委員から、静岡県側からは「事業計画に基づく両県省の交流強化に向けて」と、「両県省の経済交流の深化に向けて」と題して発言があり、また浙江省側からは「浙江省の生活ゴミ分別の現状と展望」と題して発言があり、双方は促進機構の果たすプラットフォームの機能を、更に強化していくことを確認しました。



«2020年度の事業計画・概要»

1. 友好提携の協力メカニズムを強化する。

双方は、ハイレベルでの相互訪問と会談をより多く行い、双方委員機関の間の交流メカニズムによる実務的協力関係を構築する。

2. 照準を合わせて、マッチングの効果を上げる。

双方は、浙江と静岡の産業現状や協力のニーズにより、新しい方式のマッチングを志向し、効果・向上の強化を図る。

3. 投資経済貿易協力を推進する。

双方は、産業チェーンの協力関係の深化を目指して、PRや照準を合わせたビジネスマッチング、市場開拓、技術研究開発等の事業を行う。

4. イノベーション協力の基礎を強化する。

双方は、教育・介護サービス・自然資源・環境保護・建築・交通・医療・技術管理・デジタル経済・越境EC等の分野で、相互に視察・研修を行い、研修生及び関連分野の専門技術者を相互に派遣する。

5. 人文交流と民間往来を拡大する。

双方は、音楽・書画・茶文化・民間工芸・スポーツ大会等を交流の媒体として、両省県の人的相互訪問を拡大し、民間交流の相互往来を強化し、友好提携の協力関係の基礎をより確立する。

「静岡県・浙江省経済ビジネス交流会」を開催



11月11日(月)午前、杭州市の浙江世貿大飯店において、双方の行政、協会、企業約100名が参加して、促進機構の主催により「静岡県・浙江省経済ビジネス交流会」が開催されました。

浙江省は、中国でもデジタル経済、キャッシュレス社会が最も発達している省であり、また、日本同様、急速な高齢化に伴い、高齢者福祉・健康長寿・環境等の問題が大きくクローズアップされていることから、浙江省のデジタル経済の状況、介護ビジネスの現状が紹介され、また様々な課題を抱え、多くの浙江企業が日本企業との連携意向があることも紹介されました。

SIBA、浙江省貿促会との間に覚書を交わす

(公社)静岡県国際経済振興会(SIBA)の吉林章仁会長と中国国際貿易促進委員会浙江省委員会(浙江省貿促会)の陳宗堯会長は、11月11日(月)午後、杭州市の浙江世貿大飯店において、促進機構の双方主席代表、静岡県日中友好協議会の栗原績理事長と浙江省人民政府の朱从玖副省長の立会の下で、友好協力覚書を交わしました。

覚書は、静岡県並びに浙江省の企業が両県省間における投資、貿易取引、経済協力等を円滑かつ迅速に推進するために、海外進出や国際貿易を支援する両会が、相互に連携・協力することを通じて、両県省の経済発展に寄与することを目的として、両会が所管する事業内容に応じて、相互の意見を尊重しつつ、友好的な協議に則り、可能な範囲内で連携・協力に努めていくことを確認しました。



[浙江省貿促会の概要]

- 浙江省経済界の代表的人士・企業や団体で構成される全省的な民間対外経済貿易組織
- 中国を代表する貿易振興機関である中国国際貿易促進委員会(中国貿促会)の分会
- 中国国際商会の地方機関である国際商会浙江商会の肩書も持つ(1988年~)
- 中国共産党と省政府の指導下で、業務上は中国貿促会と中国国際商会の指導を受ける。
- 1959年設立、1988年中国国際商会浙江商会の名称使用、1996年浙江省国際商会登記

交 流 往 来 点 苗

「環境ビジネスマッチング交流会」

浙江省環保産業協会の鐘亦明秘書長を団長とする一行12名が11月24日と25日、「環境ビジネスマッチング交流会」参加のため、静岡県を訪問しました。24日は双方の環境関連企業が環境技術・商品を紹介し、25日は静岡市内の浄化施設、浜松市内の産廃焼却施設を視察して、本県の環境施設に対して理解を深めました。



「浙江・静岡文化観光交流会」

11月20日、静岡市内のホテルで、静岡県と浙江省との文化観光面での交流を促進するため、浙江省文化・旅游厅の叶菁副厅長を団長とする交流代表团6名が来静し、県内の文化及び観光分野の団体・企業等と交流する目的で、浙江・静岡文化観光交流会を開催され、双方は文化・観光資源を紹介し、活発な意見交換が行われました。

浙江省工程质量管理協会視察団、来静

11月20日と21日の2日間、浙江省工程质量管理協会が組織し視察団一行12名（団長・施炯浙江省建設投資集団股份有限公司副總工程師）が日本の品質管理等についての交流と関連現場等を見学するために、来静しました。一行は、本県滞在中、木内建設の建設現場、セキスイハウス等を視察した他、（公社）日本技術士会中部本部静岡県支部静岡県技術士会との間で、PC工法などについての情報交流会を行いました。



寧波と舟山の距離を一気に縮めた『舟山跨海大橋』

浙江省は水の省といえ、省内の河川や運河、海などを通じて、地域内、そして他地域とつながり合い、杭州湾など海によって隔てられてきた地域も次々と橋が架けられ、橋を通じて新たに互いをつないでいます。

2009年に完成した「舟山跨海大橋」の全長は48km、うち橋梁部分は25km、海に架けられた橋は全部で5つあり、舟山本島と4つの島、寧波市鎮海地区を結んでいます。

これまで舟山群島は、海を隔てて対岸の寧波地域と繋がっていましたが、寧波市と舟山群島を結ぶこの「舟山跨海大橋」によって、寧波市と舟山市の距離を一気に縮め、港湾機能から海運中心としての地位が高まり、大きな役割を果たしています。

「舟山跨海大橋」は、舟山の海洋資源の開発、寧波市と舟山港の一体化を促進し、浙江省と長江デルタの経済発展を推進する上で深遠な意義を持つことになりました。この橋の完成によって、舟山群島の海上に孤立した歴史に幕が降ろされました。



(舟山) ①岑港大橋 ⇒ ②響礁門大橋 ⇒ ③桃夭門大橋 ⇒ ④西堠門大橋 ⇒ ⑤金塘大橋 (寧波)

浙江人物点描

～浙江万向集團創業者～

魯冠球



【魯冠球氏】



中国を代表する自動車部品メーカー

魯冠球氏（浙江省杭州市出身）は、1969年設立の万向集団の創業者であり、現在、自動車部品・ユニバーサルジョイントを主に、世界10カ国に拠点を持ち、4万人の従業員を抱え、総営業収入は1000億元、利益は100億元を超える中国の一大企業集団、万向集団（自動車、金融、農業、エネルギーの4大産業における企業群）を築きました。（2017年10月25日没、72歳）

最も成功した農民出身の経営者

1945年、浙江省杭州市の農家に生まれた魯冠球氏は15歳で学校を中退し、鍛冶屋をしていました。その後、自動車修理工場、食糧加工工場を自営し、1969年、6人の農民を率いて4000元の資金を集め、のちに万向集団となる“蕭山寧岡農機工場”を創立し、その後40数年来、年平均26%成長と脅威のスピードで、小さな鍛冶屋から米国市場へ進出するほどになり、中国を代表する自動車部品製造企業に発展させました。

また、中国郷鎮企業（中国の農村地域（鎮・郷・村）における経済組織（集団又は農家）によって出資、設立、経営される企業体）を発展させるために、魯氏は数十年勉強をし、2001年には、香港理工大学名誉商工管理博士号を獲得、大陸で初めてこの学位を取得した企業家となりました。魯氏の60以上の論文は『求是』、『人民日報』、『光明日報』、『経済日報』などの全国と地方新聞雑誌に発表され、「農民理論家」とも称されています。

自動車生産へ果てぬ夢

魯氏は「自動車開発は、創業から間もない80年代からずっと取り組みたかった。私がダメなら、息子が、孫がやる」と長年の夢であることを語ったことがあります。

夢は現実となり、2016年、買収した米国の自動車ベンチャーを買収し、同年12月には中国政府からEVの生産許可を取得しています。積極的にクリーンエネルギーの発展に投資し、社会的責任を負って、国内最大規模のリチウムイオン電池生産基地を建設し、2013年、世界トップ技術を持つ米国のクリーンエネルギー企業を買収しました。

魯氏が語った「1日に1つの事実を作り、ひと月に1つの新しいことをして、1年に1つ大きな事をして、一生に一つ意義があることをする」などの考えは、万向集団に脈々と引き継がれています。

生活革命!!

「盒馬鮮生」に見る中国スーパー事情

寧波大学外国語学院外籍教師
(静岡県日中友好協議会 交流推進員)

横井香織



寧波で生活を始めたころから、ほぼ毎日買い物をしてきたスーパーがあります。それは「三江購物」という地元のスーパーで、野菜や肉、卵など、どれも新鮮で安く、日本のスーパーと変わりません。あるとき知人から、サービス満点のユニークなスーパーを教えてもらいました。それが今回紹介する「盒馬鮮生」(カバ・フレッシュスーパー)です。

「盒馬鮮生」は、阿里巴巴集團（アリババグループ）が運営する生鮮スーパーです。第1号店は、2016年1月、上海にオープンしました。ここ寧波には、現在2つの店舗があります。

「盒馬鮮生」には、日本や中国の地元のスーパーと違うところが3つあります。1つ目は、魚介類などの生鮮食材をその場で調理してくれるイートインスペースがあることです。店内には生けすがあり、カニやエビ、シャコ、ザリガニ、貝類や魚などが生きたまま販売されています。買うときは、備え付けの網でエビや魚をすくい上げます。そのまま持ち帰ることもできますが、新鮮なうちに好みの味や方法で調理してもらうこともできます。イートインスペースは、休日のお昼時には家族連れの中国人で満席です。山盛りのザリガニや大きなカニを、家族みんなで美味しそうに食べています。私はいつも、魚を蒸したりエビや野菜を大きなフライパンで炒めたりするなど、家ではできない方法で調理してもらい、それを持ち帰って食べています。

2つ目は、店内で買ったものを配達してくれるデリバリーサービスがあることです。（これは日本にも同じようなサービスがあるかもしれません）

3つ目は、アプリによるデリバリーサービスです。オンラインで購入する商品と店舗で販売されている商品は、リンクしています。何度か店で買い物をしていれば品質がわかりますから、安心してアプリで購入できます。食材をそのまま購入するだけでなく、調理して配送してもらうこともできます。どちらのサービスも、「盒馬鮮生」から3km以内なら30分以内で配送されることになっています。この盒馬鮮生のデリバリーサービスが受けられる居住区の人気が高まっているという話もあるようです。一度このサービスを使うと、あまりにも便利でやめられません。

最近は「三江購物」、「盒馬鮮生」に加えて、コストコのような会員制の超大型スーパー「山姆会员商店」へも行くようになりました。ここも寧波の中国人に大人気です。これといった娯楽のない中国の地方都市では、ショッピングモールや大型スーパーを家族で散策するのが、人々の楽しみの一つになっているのです。



【盒馬鮮生】



【現場でさばいて、調理▶配達】

～中国民間愛情物語～『梁山伯と祝英台』

国家级無形文化遺産 「梁山伯と祝英台」という二人の恋愛を語った民間説話は、中国の四大民間説話の一つ、東洋の「ロミオとジュリエット」とも言われています。西晋の時代より、1700年以上伝わるこの説話を元にして、越劇『梁山伯と祝英台』、バイオリン協奏曲『梁祝』、映画『梁山伯と祝英台』など、様々な化芸術作品が創作され、その作品を通じて、世界に広く知られるようになり、2006年には国家级無形文化遺産に登録されました。

『梁山伯と祝英台』

昔、聰明で美しい祝英台という名の女の子がいました。しかし、当時は女の子が家を出て学校に行くことは出来ない時代でした。祝英台は、男装して男になれば、学校に通えると考え、学校へ通うことがついに実現しました。 同時期、貧乏な家に育った青年・梁山伯は杭州に赴き学問で一旗あげようとしていました。時同じくして、彼らは同じ学校に入学し、共にいたわり、互いに助け合い、親友として友情関係を益々深めましたが、梁山伯は学校生活の最後まで祝英台が女の子であることに気づくことはありませんでした。

祝英台は何度も自分が女の子であることを梁山伯に密かにわからせようとしたが、生真面目である梁山伯には少しも彼女の思いは伝わりませんでした。ある日、祝英台は父から手紙を受け取り、直ちに故郷に帰らざるをえなくなり、別れに臨んで、祝英台は梁山伯に私の家には一人妹がいて、私と全くそっくりであり、その気があるなら、出来るだけ早く私の家に来て求婚して欲しいと彼に告げ、梁山伯はこれを聞いてとても喜びました。

祝英台が家に帰ると、案の定、父親から結婚の話が出され、これに拒絶し、梁山伯のことを出したが、断固反対されました。梁山伯は勉学が修了したのを機に、気になっていた祝英台の家を訪ね、祝英台の妹に会って、求婚しようとしていました。祝英台の家を訪ねると、妹ではなく、本人であることがわかり、求婚しましたが、父親に断固反対されてひどく落ちこんでしまい、その後、病気になり、亡くなりました。

祝英台は梁山伯の訃報を人伝に聞き、悲しみの中、止む無く父親の薦める高官の息子と結婚することになりました。祝英台は父親に結婚の日、新婦をのせた花輿が梁山伯の墓前の前を通ることを願い、許されました。墓前の前にくると、突如、雨が降り出し、しばらくすると、陽光がさし、一対の蝶々が墓の中から舞い上がり、飛び立っていきました。

